

氏名	中野 祥子		
授与した学位	博士		
専攻分野の名称	文化科学		
学位授与番号	博甲第 5520 号		
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)		
学位論文題目	在日ムスリム留学生の困難と対処方略からみた異文化適応		
学位論文審査委員	教授 田中 共子	教授 長谷川 芳典	
	准教授 堤 良一	准教授 高谷 幸	

## 学位論文内容の要旨

予備論文で指摘された問題点の修正が行われ、構成と文章がより整い、完成度が高まったという見方で一致した。審査員の質問への受け答えは的確に行われ、今回の研究結果の限定性を認識した上で、得られた学術的な成果と今後の展望とを語ることができていた。

審査においては、主題となっている異文化適応の概念を軸に、密度の濃い質疑応答が行われた。今回見いだされた新たな適応タイプと従来の適応像との関連、本研究における適応観、良好な適応としての該当例の判断、適応の過程や下位分類の可能性などについて、学術的な説明が求められた。また語りの分類の基準、対象者選択の意図と方法、成功例に注目した理由、社会的構えの影響など、方法の詳細に関する質問が行われた。さらに対象者の属性による違い、倫理的配慮によって表記を控えた情報など、結果の細部が尋ねられた。そして集団レベルの研究の可能性、今回の対象者集団を超えた一般化の可能性、教育応用のさらなる展望など、研究の発展性に関する問いが期待と共に投げかけられた。

本人はこれらに丁寧に答えながら研究構築の過程を明らかにし、自身の学術的な手法と思考を語った。本研究は、まだ十分に解明が進んでいない対象者の適応像を、実証的に把握することに意欲的に取り組んでおり、そこから新たな適応概念の提唱と教育応用の可能性を呈示する独創的な研究であり、優れた学術的成果として評価できるものと考えられる。

問題点としては、7 章以降とそれ以前との繋がりが滑らかではないとの指摘がなされたが、連結の表現を補うことで緩和されるものと思われた。引用文献のミス、誤字、図の掲載場所のずれ、表

現の一貫性、図の情報不足、要旨における情報の抜け落ちなど、表記に関するいくつかの問題が指摘された。誤記については訂正が必要との指示がなされた。

上記を総合して、本論文は学位論文に相応しい質と量を持ち、発展可能性を豊かに備えた興味深い研究であると考えられ、十分に合格水準に達しているとの結論が得られた。

## 学位論文審査結果の要旨

第一章では、在日ムスリム留学生が増加しつつある現状が統計などを用いて述べられ、彼らの異文化適応研究が未開拓であることが、心理学における異文化適応研究の系譜に位置づけながら述べられている。本研究の目的は、在日ムスリム留学生の異文化接触場面における困難と対処の観点から、その異文化適応像の解明を試みることでありとされている。

第二章では、在日ムスリム留学生 21 名を対象に、半構造化面接を用いた調査研究について述べられている。彼らが社会生活上の困難と対人行動上の困難を経験していることが示され、日本文化的価値観や振る舞いを受容する困難と、ムスリムとしての信仰を保持する困難が認められた。第三章では、その困難への対処方略を探っている。ホスト社会との調和は保つが文化受容は限定的な、併存型適応のスタイルが見いだされた。第四章と第五章では、先のインフォーマントのうち 5 名の協力を得て、2 年後の追跡調査が行われている。社会生活上の困難は軽減されているが、対人行動上の困難は社会生活の発展に伴って、維持または増大していることが分かった。日本人側の理解があると困難は緩和されており、周囲の対応は重要な意味を持っていた。第六章では、在日ムスリム留学生と安定した関係を築いている日本人学生 6 名への調査が行われ、交流の中で実践されている認知と行動が整理された。彼らの関わり方は、在日ムスリム留学生への異文化適応の支援になる面を持っている。第七章では、得られた知見から教育支援への応用研究が試みられた。在日ムスリム留学生の協力を得て、日本人学生を対象とした文化学習教材である文化アシミレーターが試作された。日本人大学生 135 名の反応が分析された。第八章では、ムスリムが 9 割を占めるインドネシアに赴き、現地に留学している日本人学生 10 名に試作版のアシミレーターを使ってもらった。基本的にムスリムとの対人関係形成に役立つ教材であることを確認し、反応から更に教材を洗練させた。第九章では、日本の大学で学ぶ日本人大学生 78 名を対象に、改訂版の文化アシミレーターを用いた異文化間教育の介入実践研究が行われた。

第十章では、在日ムスリム留学生の異文化適応像が総括された。そして留学生と日本人学生の両方への異文化間教育の可能性について論じられた。